

## 第27回流域シンポジウム

今回で27回目となる2021年度流域シンポジウムを、12月12日(日)午後1時から開催予定です。今年度は、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえながら、ユニコムプラザさがみはらセミナールームの会場とオンライン会場で開催できるように準備を進めています。

今回は「森を動かす」をメインテーマ、「わたしと森の関係 木を使う暮らし」をサブテーマとして、東京大学大学院 教授の蔵治光一郎先生による基調講演のほか、木材を利活用されている団体による活動発表を予定しています。

その他、詳しいスケジュールや申し込み方法等については、協議会のホームページに随時掲載していきます。ぜひ、ご参加ください。

桂川・相模川流域協議会ホームページ <http://katurasagami.net/>



### NPO 法人 海の森・山の森事務局が、 地域環境保全功労者として環境大臣から表彰されました！

環境省では、毎年6月の環境月間にあわせて、環境保全等について顕著な功績があった方(団体)に対し、その功績をたたえるため、環境大臣による表彰を行っています。

今年度は、相模川よこはま地域協議会の会長である豊田直之氏が代表を務めるNPO法人海の森・山の森事務局が、「地域環境保全功労者」として環境大臣から表彰されました。

NPO法人海の森・山の森事務局は、小学校における環境教育の出前授業、広報誌等による環境やSDGsへの取り組み等の情報発信、河川、海岸、海中の清掃やごみ調査事業に積極的に取り組まれているところです。

このことについて、次号で記事を掲載する予定です

### 入会のご案内

あなたのその力が豊かな水環境を創ります。

協議会では、さまざまな活動を通じて、水環境の保全・再生に努めています。

桂川・相模川流域協議会に興味をもった方は、是非入会して下さい。入会手続きは、下記事務局へ問い合わせ下さい。

原稿  
大募集

#### 募集要項

本誌に掲載する原稿を募集します。

- テーマ「あなたの好きな流域の風景」
- 文字数は800字程度と写真数枚で1ページに収まるもの
- 応募原稿は自作未発表のものに限ります。

#### 応募方法

お名前、ご住所、お電話番号を明記の上、下記事務局あて郵送又はメール(ft-rinmuk@pref.yamanashi.lg.jp)までお送りください。

採用された作品はあじえんだ113第48号以降に掲載します。

また、採用された方には粗品を贈呈いたします。

たくさんのご応募をお待ちしております。

表紙写真/水ガキ養成講座 撮影場所: 神川橋下流(寒川町)河原 写真提供: 中門吉松  
本紙に対するご意見・ご感想を下記事務局までお寄せ下さい。

あじえんだ113 No.47(2021.10発行)

発行 桂川・相模川流域協議会  
編集 あじえんだ113編集委員会

桂川・相模川流域協議会ホームページアドレス <http://katurasagami.net/>

事務局 山梨県林政部富士・東部林務環境事務所 〒402-0054 都留市田原2丁目13-43 TEL.0554-45-7811 FAX.0554-45-7807  
神奈川県環境農政局緑政部水源環境保全課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL.045-210-4358 FAX.045-210-8855



■やまなし森の印刷紙  
この印刷紙には、FSC®  
森林管理認証を取得した  
山梨県有林からの木材が  
使用されています。



ユニバーサルデザイン  
(UD)の考えに基づいた  
見やすいデザインの文字  
を採用しています。

# あじえんだ

2021.10  
第47号



- 夏、私は水ガキになった
- 流域の湧水を訪ねて(1)
- 川の記憶を訪ねて(21)
- 相模川水系の魚たち⑤
- 山梨百名山⑦ 三頭山を楽しむ

# 夏、私は水ガキになった

## 2021年度水ガキ養成講座

報告者●岡田 一慶／市民会員

昨年はコロナ感染予防のため寒川町の相模川河原での開催は中止になったが、2年ぶりに7月24日、水ガキ養成講座を開催した。

今年度は5月から口コミで水ガキ養成講座の開催が伝わり、リピーターの参加の申し出が相次いだ。また、7月に朝日新聞神奈川マリオンのイベント欄に参加者募集の記事が掲載されて、参加者は一気に増加した。スタッフを加えると100名を超える参加者になった。

主催はさがみ地域協議会。共催は相模川湘南地域協議会、湘南生き物楽校だ。

湘南生き物楽校の臼井さんがライフジャケットや帽子、マスクの着用、協働してテントなどの撤収を行うことなど、水の事故防止に加えコロナ感染対策など気をつけなければならないことを参加者に伝えている。



カヌー体験と生き物調べの2つの班に分かれて始まった。

カヌー体験は色とりどりのカヌーやイカダを参加者で水辺まで運ぶことから始まる。

ワンドになったカヌー会場は水深が深いところで1.5mほどで流れがほとんどなく、カヌーの操作は子供の力でも可能だ。スタッフはあまり口を出さないで事故がないように見守ることにしている。子供は手助けして欲しい時にスタッフに声をかけることで、小学生などの参加者でも不安なくカヌーが楽しめる。



イカダはゴムタイヤに板を縛り付けたもので十分な浮力をえている。これが子供には人気がある。最初はおとなしくしているが、筏の上で川風に吹かれると気分が上々になり、泳ぎ出す。筏をみんなで動かし友達を乗せたいくなるのだ。子供たちが何かを叫び、歓声を上げている。心から楽しんでいることが伝わってくる。



生き物調べは、浅瀬の石の下や水辺の草影に隠れている小魚やカエルなどを手網で捕えて、どんな生き物があるのかを確かめる。

今回見つけた生き物の中には体長5cmほどのウナギの幼魚(クロコ)、ナマズの幼魚、ハゼの仲間の幼魚などがいた。この場所が生物にとって住みやすい場所になっていると思われる。水槽に移された生き物を子供たちは目を輝かせて見入っている。

しかし外来種で小魚を捕食するブラックバスの幼魚もいたので、心配でもある。

またトウキョウダルマガエルが見つかった。このカエルは神奈川県絶滅危惧種で希少種だ。講師役の臼井さんがトウキョウダルマガエルが見つかったと子供のようにしゃいでいる。相模川本流では非常に珍しいのだ。

嬉しいことがあった。例年、疲れたスタッフだ

けで撤収作業を行っていたが、参加者がスタッフと一緒にテントやカヌーの撤収作業をやってくれたことだ。参加者と一体感が強まり疲れも半減した。

来年もまたみんなで水ガキ養成講座をやろうという気持ちが出てきた。

相模川湘南地域協議会の峯谷さん、中門さん、小林さん、河野さん、井上さん、坂本さん、湘南生き物楽校の臼井さん、赤木さん、さがみ地域協議会の倉橋さん、市村さん、新井さんなどたくさんの方にスタッフとして参加していただいた。



新型コロナウイルス感染症の対策を講じて実施しています。

写真提供/中門 吉松

# 桂川・相模川流域の湧水を訪ねて(1)

報告者●中門 吉松/市民会員

湧水は、台地の崖や谷間などから澄み切った水が地中から湧き出し、桂川・相模川の上流域では豊かな環境の象徴として周囲の自然環境と共に人々に潤いを与えてくれます。下流域では都市化の中であって、中小河川の貴重な水源となり、水辺の生き物や暮らす人々にとって貴重なオアシスとして親しまれています。

\*1「桂川・相模川アジェンダ 21」事業「地下水・湧水調査」で訪れた流域の湧水地をシリーズで紹介します。\*1 アジェンダ 21 はHP に掲載しています。

## 1. 桂川・相模川の源流としての湧水

桂川・相模川は富士山北東麓の山中湖や忍野八海などの富士山伏流水を水源としています。\*2 富士火山は1万年前以降に形成された新しい成層火山で、富士5湖のひとつ山中湖は丹沢山地との境、御坂山地の境には河口湖・西湖が富士火山の溶岩流に堰き止められて形成された湖となった。山中湖の水面の標高は約1,000mで他の湧水地より最高位にあり源流とされる。

\*2 相模川流域誌(国交省)など。



【桂川源流・山中湖の流出口】



【食事処内の湧水庭園】

有名な忍野八海は、富士山からの伏流水による湧水池(湧池・出口池・お釜池・濁池・鏡池・菖蒲池・底抜池・銚子池)をいいます。それぞれ湧水量は異なり、全ての池が昔のよ

うな面影を留めてはいませんが、湧池は今でも豊富な湧水量が見れます。他にも忍野村では至る所で豊富な湧水が見ることができ、庭園が整備され



【基底溶岩からの湧水地】

## 2. 桂川・相模川下流域の湧水(寒川町)

厚木市・海老名市から下流の相模川に沿う流域は平野が広がり「相模川沖積低地」と呼ばれ、大部分の土地は相模川の氾濫でできた自然堤防地帯である。両岸の茅ヶ崎市・平塚市の海側では海浜に形成された砂州・砂丘が広がっていて、湧水は台地の崖や谷間で僅かに見られる程度である。湧水調査を行った寒川町では崖線からの湧水が数ヶ所で見られた。平地では地下水を汲上げる浅井戸から多量の水が自噴する場所を数ヶ所で確認された。



【寒川神社神嶽山神苑(八氣の泉)】

寒川神社神嶽山神苑内の「難波(なんば)の小池」は、古来よりご本殿の真裏に位置し、寒川神社の起源に深く関わりのある神聖な泉と伝えられているという。苑内は「八氣の泉」などが整備されており四季折々に楽しめる場所である。

(注) 開苑期間は3月初旬~12月初旬



【建屋の外に引かれた自噴水】

調査時の聞き取りで古老が「昔からこの一帯は地下水位が高いので、少し掘ると直ぐに水が出てくると聞かされていると話を聞かされてきた」と話された。

JR 相模線寒川駅近くでは、改修工事後に浅井戸の場所からの自噴水が止まらずに建屋の外までパイプを引いて水を流しているのを見ることができる。古老の話が実感できる場所である。

## 3. 湧水地を訪れる上で注意して欲しいこと

- ・訪れる際には、民有地内や一般に公開されていない場所への無断での立入りは避ける。
- ・湧水地の環境保全を心掛けて散策する。

### 1. 相模川の源流(山中湖)



### 2. 相模川下流域の自噴水



## エコのつぶやき

これからも、いつも通りが続くことを願って

●早川 美幸/あらいそ ECO クラブ

相模川を横目にランニングを続けている。

このごろ、相模川の水位が低いようだけど、まとまった雨が降っていないからかな、先日の大雨で城山ダムを放流していたけど、この夏の水量は確保できているのかしら。

川に浮かぶ渡り鳥を眺めたり、大山を仰いだり、自然と季節の移ろいを間近に感じられるここでの暮らしは何物にも代えがたいと感じつつ、2年前の台風を思い出す。

私の住む地区は昨年、家屋倒壊等氾濫想定区域に指定された。2年前の台風による大雨影響で避難命令が出たときは、近くの中学校に避難した。訓練を兼ねるつもりで避難準備をしたが、1階の床上浸水を想定すると結構な準備が必要だった。オーディオ機器や書籍、食品、その他貴重品などを2階に運びあげるのに約1時間、家族で階段を行ったり来たりした。向かった時間が早かったせいか、体育館にはまだ数組のんびり過ごすつもりで色々準備もしたがすっかり持て余して、台風が過ぎて雨が止んだ当日夜に自宅に戻ってしまった。城山ダムの放流による水位上昇の影響を目の当たりにしたのは翌朝、広い川幅いっぱいには流れる濁流がほんの1メートルほどの高さまで迫っていた。



三段の滝上より

自宅周辺が水につかるほどの水害に至るのは城山ダ

ムが崩壊した場合と聞く。先日の大雨による大規模な土砂災害は盛り土が流れたと報道されていた。人の暮らしのために自然を切り開き作り上げたものの弱さを感じる。そして雨水害につながる短時間豪雨などの気候の変化の一因は、やはり地球温暖化の影響で、一度かかったアクセルは簡単に戻らない。

地球のあゆみにおける人間の営みは24時間に例えると2分にも満たないとか。そのわずかな時間のうちに人の暮らしを優先して、いろいろな影響を与えてきたのではと思う。



日常の相模川

磯部頭首工には、いつも2羽のアオサギが上流を眺め佇んでいる。夕暮れには宿り木に群れているシラサギが、朝早い時間は川面で朝食タイム。いつものベンチに寝ている猫3匹。やあ、と心の中で声をかけながら走り去る。いつも通りで安心。

河原の景色がまた大きな災害で一変するのは怖い。このいつも通りが長く続くように、自分にできることからやってみよう。

※長らくご愛読いただきました「エコのつぶやき」は今号で連載終了となります。





# 「富士山ハザードマップ」に学ぶ

報告者●小島 瓊禮／愛川町在住 琉球大学名誉教授

富士山の噴火に備えては、「富士山ハザードマップ」が用意されている。それが新しく改定され、2021年3月26日に、富士山火山防災対策協議会で示されたと、翌朝の新聞報道で知った。前回の平成16年策定以降に、新たに蓄積された科学的知見を加え、とくに噴火活動が活発な年代に相当する、5600年前から現在までを条件に入れているという。それは、いわば、今日科学的に推定できる、最大の被害状況を示していることになるとする。

この『あじえんだ113』の世界で、「川の記憶を訪ねて」を綴っている私は、文献の記録に正確な年代の典拠を求め、地元の村の人たちが伝えて来た知識に注

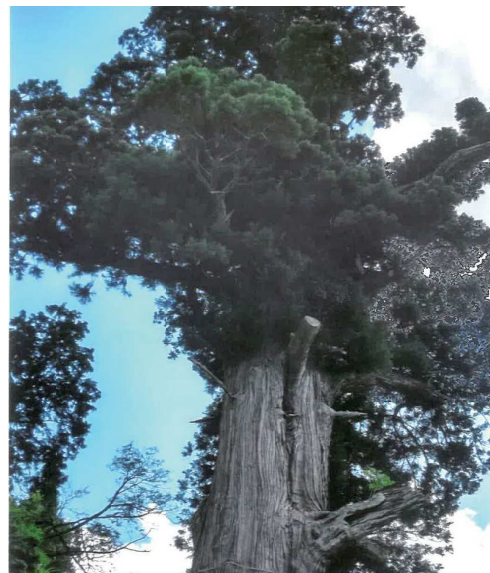
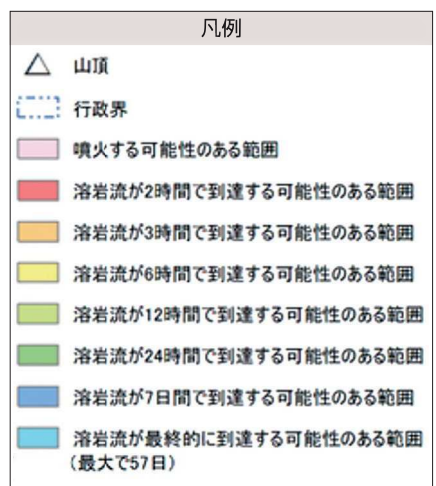
目すると同時に、大自然の変化の地学的情報は、自然科学的な傍証になるので、できるだけ吸収する努力をする。近年、私は「道志の谷」が相模川の源流であると重視してきたが、今度の「ハザードマップ」の資料を見て、ますますその思いを深くした。

まず第一に、神奈川県域でも、地表を溶岩が流れ下る「溶岩流」が到達する可能性があるという。それが土地の低い河川沿いに起こるとすれば、北の桂川水系と、南の酒匂川水系になる。しかし、火山灰はともかく、「ハザード統合マップ」によると、道志村や神奈川県山北町北部などの地域には、溶岩流、火砕流、融雪型火山泥流、大きな噴石などの被害の予想は、記されていない。ちょうど

そこが、道志の谷から南の中川の谷に続く地域になる。

文化11年(1814)成立の地誌、松平定能編『甲斐国志』には、道志村の東南の山を隔てた相模国内にある、中川や帚(箒)沢などの山村を「山相模」と呼んだとある。村人の伝えに、古くは山相模は道志と一つの郷で、総称は相模ノ郷で、中川、帚沢、道志は郷の中の村になる。国界は、富士山の小天井から梨ノ木平に下り、三国峠へ続いて西丸、東丸を過ぎ、榎木峠を越えて帚沢の二股杉、神野川の蛭ヶ岳、大コヒジカメワを分界とする。

この「相模ノ郷」とは、朝廷の史書『日本後紀』延暦16年(797)3月2日の条にいう、甲斐と相模の国境争いで、甲斐国都留郡鹿留村の東辺の砥沢を堺に定めたとある。それ以前からの相模分に違いない。九世紀の『和名類聚抄』の郷名一覧には、「相模郷」が甲斐国都留郡の最初にある。そこは後の道志村で、貞観の大噴火(864~6年)などのとき、都留郡の地を再建する拠点として、都留郡に編入したとするとよくわかる。



中川の谷の象徴「箒杉」樹齢二千年 国指定天然記念物



丹沢湖畔に残ったヤケズ(焼津)段丘が開け家屋敷がある

『古事記』(七二二年)景行記にいう、ヤマトタケルが火攻めに遇った「相武の小野」の「焼津」という場所は、どこを想定しているのだろうか、ことさらに探求しているとき、山歩きの名人で、厚木市の県史談会で活躍している小島正さんが、山北町の中川の谷に、「焼津」という地名があることを教えてくれた。『新編相模国風土記稿』の足柄上郡中川村の条の「小字」の項に、「ヤケズ」と仮名書きで見える。

久しく『古事記』の本文が、「焼遺」と文字を誤って紹介して来た中で、ヤケズで生き続けられているとは、古い地名に違いないと私は信じた。海で入水した妻のオトタチバナヒメを、「あづまはや(私の妻はなあ)」とヤマトタケルがしのんだのは、足柄の坂を登って甲斐に越える道であった。火攻めの舞台は、ヤケズあたりがふさわしい。そうすると、中川の谷は、大和国から常陸国へ行く、当時の東海道であった可能性を持つ。

## 相模川の源流域「相模郷」

●小島 瓊禮／愛川町在住 琉球大学名誉教授

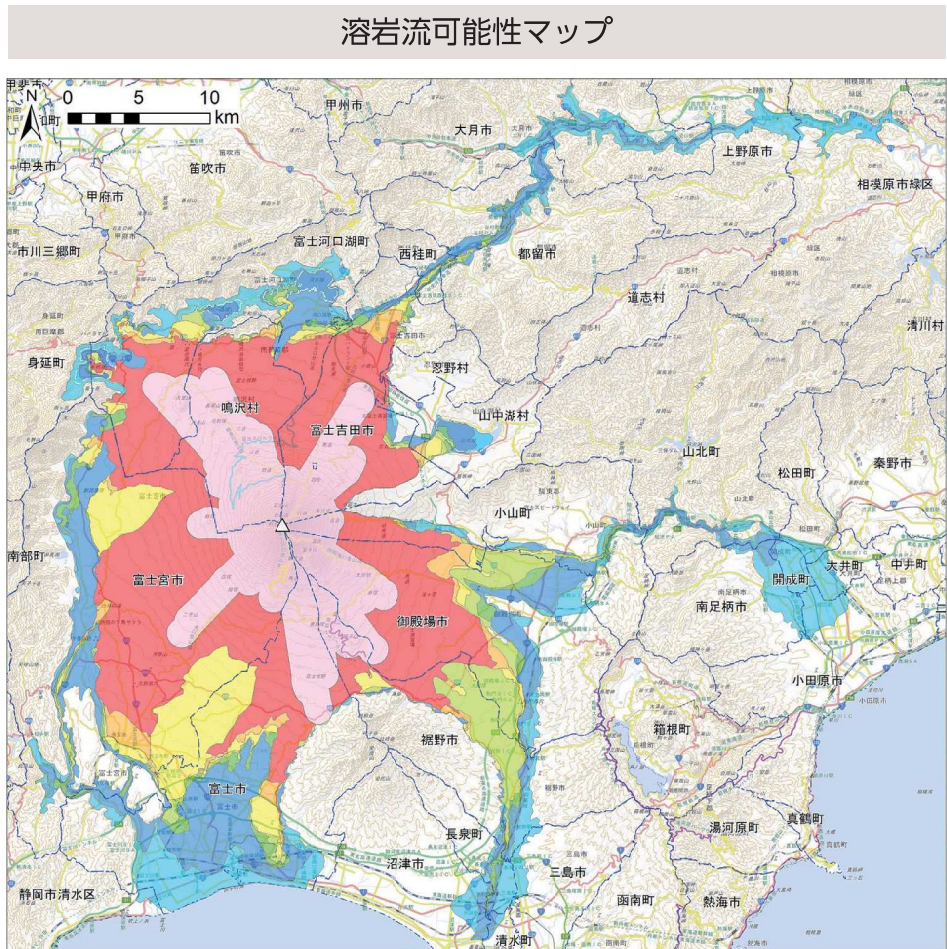
地元では、中川の谷と道志の谷とは、つねに行き来があったと伝えている。ここを公の道が通っていたとすれば、行きは船を引いて上り、帰りは船に乗って下る、船越の山であろう。『万葉集』巻十四「相模国歌」に「足柄の安伎名の山に 引こ船の後引かしもよ...」(三四三一番)は、その引き船の実景を踏まえた歌に見える。巻三にも、足柄山で船木を伐る歌がある(三九一番)。山中で木を伐り、丸木舟を造ったのであろう。



ヤケズで西の山から中川に流れこむ菩提沢にかかる県道の橋「焼津橋」の銘板

る役所もあったはずである。ヤケズとは、「宅津」ではなかったか。「津」は船着き場であり、「宅」は人が住む屋敷である。「宅」の「け」も乙類の仮名で、物語が「焼津」が語源であるとすると動詞「焼け」の「け」も乙類で、「焼津」が「宅津」に由来することに矛盾はない。『日本書紀』が「焼津」の舞台とする焼津市の焼津神社の地にも、海の港に、「宅津」があったかもしれない。律令制が確立する前、相模国は相武国と称したという。道志の谷から中川の谷にかけての地域が、都にも近く、拠点になる相模郷であったのであろう。足柄の山を越えると、丸木舟をたよりに中川をさかのぼり、舟を持って道志の谷に向かう。そこには相模川の上流があり、丸木舟で一気今の平塚市四宮の前鳥神社がある岬まで下る。ヤマトタケルはそこから船で三浦半島に着け、走水で利根川と海の潮の均衡が取れた時間に、静かな海を安房へ渡ったことになる。オトタチバナヒメの入水は、その神秘的な時間の由来を語る神話であった。

写真提供/NPO愛ふるさと 撮影者/小倉久典 令和三年七月二十五日 午前撮影



## 河川敷や丘陵に見られる植物

●長岡 恂／厚木植物会

### ミズオオバコ (トチカガミ科)

かつては水田雑草の代表格の一つであったとか。それが水田の環境変化、水質汚濁などにより激減してしまったようだ。

30年以上ぐらい前から廃田となっていた谷戸田はヨシが生い茂り人を拒んでいた。ヨシ刈りや根茎を取り除いて水田復帰したところミズオオバコやウリカワが出現した。永年ヨシ原で休眠していたようだ。昨今の水田は立派な農機が入り、きれいに整備されているが農薬の大量散布で水田雑草は薬剤抵抗性があるオモダカやコナギばかり。このミズオオバコ水田を見ると30年前の水田風景がよみがえる。

1年草の沈水植物。花卉3枚の大きな白色～薄いピンクの花を8月～10月に咲かせる。果実には多数のひだがある。葉は心臓形で水中葉、オオバコの葉のよう。夏日、水盤に入れて愛でると涼しげだ。果実は良く結実するが、播種しても翌年必ず芽を出すとは限らない。野生種は気まぐれのように30年も休眠するくせがついている。

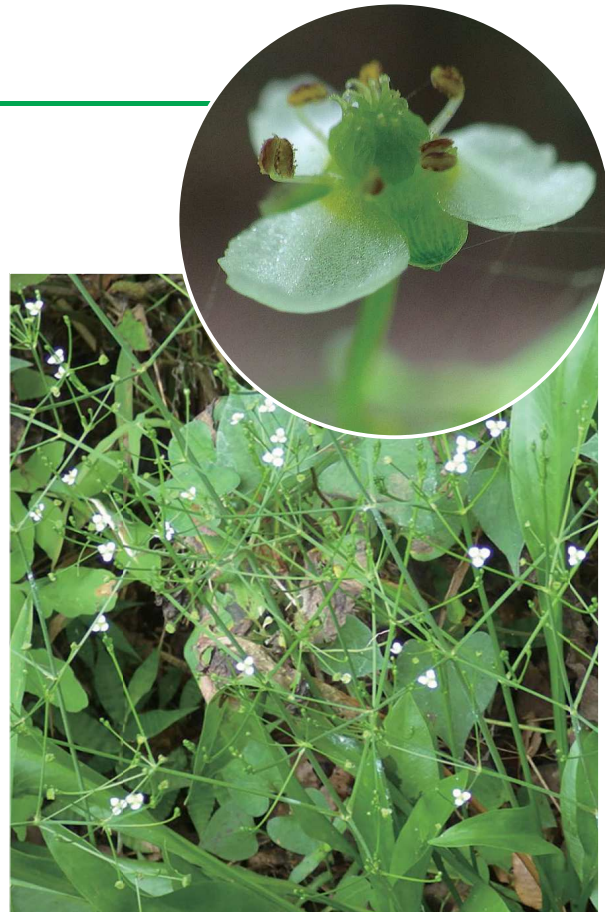
西表島ではタークブ(田んぼの昆布)と方言で呼ばれ、水中葉を昔みそ汁に入れて食べていたそうで、さすが今ではそんなには生えていないようだ。(西表島の巨大なマメと不思議な歌：盛口満 2004) 絶滅危惧種の葉っぱを頻りに食べていたようでビックリ。



### ヘラオモダカ (オモダカ科)

オモダカの名前が付いているが田んぼの雑草オモダカは矢じり形の葉で、歌舞伎で大向こうの掛け声“おもだかや～!”や沢瀉家紋も良く知られている。一方、ヘラオモダカは知名度も低く属が異なりサジオモダカ属。オモダカは雄花と雌花が別々に付く単性花だが、こちらは両性花。葉はヘラ形で花も小さく白色の花弁は4mmほど。一日花で夕刻には閉じる。花期は7月～9月。自生地は里山の湧水の近くの湿地や田んぼの水路が適地のように。近年シカによる食害が目立ち、満足に開花までに至らないのが残念だ。何処でも見られないチョットした珍品。神奈川県には花の各部分が大きいトウゴクヘラオモダカも分布しているようだが、まだ実物を確認していない。

よく似たナガバオモダカは雌雄異株で国内では雌株のみが確認されている。ジャイアントサジタリアと呼ばれてホームセンターの園芸売り場で見掛ける。メダカと相性が良いとのことでビオトープの必需品のようだ。同居のアメリカザリガニが茎をちょん切って食べてしまってもすぐ再生する。その強靱な生命力はさすが北アメリカからの帰化種だ。要注意外来生物に指定されており、アメリカザリガニとともに野外へ放ししないほしい。



## オナシカワゲラの仲間

●守屋 博文／神奈川昆虫談話会

### ○清流の指標種

オナシカワゲラの仲間は、河川本流域や小河川、湧水流など、水質の良好な水域で広く確認することができます。本流域や小河川では、川岸の伏流や落ち葉の堆積した、多少流れの緩やかな場所で見られ、湧水流では、細流内や岩盤の滴りなどいたる所で確認することができます。

日本国内からは60種以上が知られていますが、名前のついていない種類も多く存在しています。カワゲラの仲間は清流の象徴種となっていますが、今回紹介するオナシカワゲラの仲間は特に清流の指標となるグループかもしれません。

### ○1年中見られる?

昆虫はその生活史の中において、卵、幼虫、さなぎ、成虫の時期が、その種類によって決まっています。数年に1回成虫として現れる種類や、1年に1回、1年に数回など様々です。オナシカワゲラの仲間も年1回春や秋に発生する種類や、春と秋2回発生する種類、冬季に発生しているケースもあります。このようにあらゆる時期に様々な種類が発生していることから、いろいろな場所で調査していても、いつでも確認できるというイメージが強くあります。

並行して、数の大小はあるものの、水の中で生活している幼虫も1年中見ることができます。

特に水温が1年中変化の少ない湧水流などでは、その現象が顕著のような気がします。

### ○オナシカワゲラってどんな虫?

虫を見分けるのは、慣れないと大変なことで、敬遠されがちかもしれません。ここではオナシカワゲラの知名度を上げるため、あえて紹介しておきたいと思います。

成虫の形態は、カワゲラ類の構造と基本的に変わりはありませんが、体長は5～10mmと小型で細身、体や翅は黒から黒褐色です(写真1)。他の科にも同じような形態の種類がありますが、オナシカワゲラ成虫の尾は1節で、頭部が幅広、翅の先端近くに翅脈が×に見える部分があります。終齢幼虫は10mm前後で、翅になる部分がハの字に張り出しています(写真2)。さらに4つのグループに分けられ、頭部腹面に糸状のエラがあるフサオナシカワゲラ属(写真3)、指状のエラがあるユビオナシカワゲラ属(写真4)、いぼ状のエラがあるインドオナシカワゲラ属、そしてエラが確認できないオナシカワゲラ属となります。

ちょっと難しいかもしれませんが、桂川・相模川水系では多くの場所で確認できるグループですので、ぜひ仲間分けにチャレンジしてみてください。



写真1  
オナシカワゲラ科成虫



写真2  
オナシカワゲラ属幼虫



写真3  
フサオナシカワゲラ属幼虫

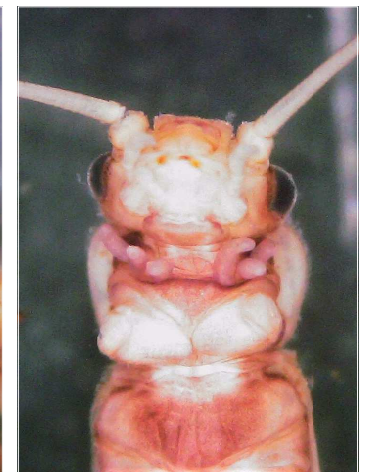


写真4  
ユビオナシカワゲラ属幼虫

# マハゼとアシシロハゼ

●工藤 孝浩／神奈川県水産技術センター内水面試験場（文・写真）

夏秋の相模川を代表する釣りものと言えば？  
盛夏の頃までなら迷わずアユと答えますが、秋の気配を感じるとハゼを思わずにはいられません。そう、相模川の汽水域は神奈川県屈指のハゼ釣り場で、馬入橋周辺から河口まで一級ポイントが連なります。

ハゼの仲間は国内だけでも660種以上があり、もっとも多様性に富んだグループです。今なお新種が次々と発見されており、私が相模湾で発見した新種には、*Trimma kudoi*（標準和名：ナガシメベニハゼ）と私の名が学名につきました。

中でもマハゼは「ハゼの中のハゼ」で、美味なうえ全長20cmを優に超え、各地で釣りの対象として親しまれています。今回は、同じハゼ科マハゼ属のアシシロハゼとともに紹介します。

## マハゼ



マハゼ（2021年7月8日相模川支流小出川産、標準体長84mm）



着底直後のマハゼ仔魚。アシシロハゼの好物で、両種間には「親の仇が子で討たれ」的な因縁を感じさせる（2008年4月11日横浜市神奈川区地先産、全長18mm）

産卵期は冬で、水深数mの砂泥の海底に雄が長大な巣穴を掘って卵を産みつけます。全長4mm前後のふ化仔魚は浮遊生活をして動物プランクトンを食べて育ち、2cmほどで河口干潟などに着底します。着底後は主に多毛類を食べて急速に成長し、多くは1歳で成熟して産卵後に死亡します。

若魚は8月になると8cmを超えてハリに掛かるようになり、釣りシーズンが開幕します。浅い場所に群れて食欲旺盛かつ警戒心が薄く、初心者でも数が釣れます。しかし、秋が深まり大きく育つと徐々に深場へ移動して釣るのが難しくなり、産卵期ともなるとベテランをも手こずらせる魚になります。これが、幅広いファンを持つハゼ釣りの奥深さのゆえんです。

近年東京湾では、数が減るとともに秋に小型が目立つようになりました。耳石から誕生日を調べたところ、小型は初夏に産まれていることが分かったのです。繁殖期に何やら異変が起きているようで、大変気になる現象です。こちら相模川では、昔ながらのサイクルでハゼ釣りが楽しめていることから、健全に世代を重ねていることが伺えます。

## アシシロハゼ



アシシロハゼ（2019年7月11日相模川支流目久尻川産、標準体長60mm）

マハゼより頭が小さく、尾柄が高く、吻がやや短いです。また、鱗が少ないこと、大型では体側に多くの淡色の横帯をもつこと、雄では第1背ビレの棘が伸びることなども見分けるポイントです。北海道全沿岸（マハゼはオホーツク海沿岸を除く）から九州南岸（マハゼは屋久島）までの全国の沿岸・河口域に分布し、マハゼよりほんの少しだけ北方の種といえます。

産卵期は夏から秋で、石や貝殻の下面に卵を産みつけます。仔魚は浮遊期を経て晩秋から冬に河口干潟などに着底し、主に小型の甲殻類を食べて育ちます。成長はマハゼより遅く、最大でも全長8cmどまり。多くは2歳で産卵・死亡します。

面白いことに、夏から秋にマハゼが浅場を席卷すると追われるように姿を消し、冬にマハゼが深場へ落ちると再び浅場に現れます。そして、春にマハゼの仔魚が着底してくると、あたかも敵を討つかのごとく仔魚を食べまくることが、近年の研究から明らかになりました。

相模川でもマハゼを食べているのかはまだ調べられていませんが、両種には世代をまたぐ因縁めいた興味深い関係がみられるのです。



「湘南潮来」とも呼ばれる相模川の汽水域はハゼ釣りのメッカで、マハゼをはじめ様々なハゼを育む（2019年5月15日平塚市馬入地先の相模川本流）

# 桂川・相模川流域の山梨百名山

## 三頭山を楽しむ

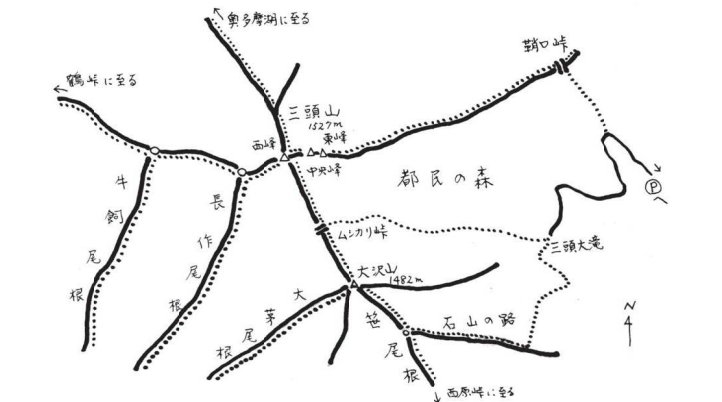
報告者●中村 光義／市民会員

▲三頭山は桂川の支流鶴川の源頭部に位置する東京都と山梨県にまたがる標高千五百メートルを超える大きな山で、れっきとした山梨百名山の一つです。しかし、南東部に開発された都民の森、奥多摩周遊道路により、現在、この山を訪れる大部分の登山者は都側からで、山梨側からのそれは少数派。おまけに、近年、都が山頂部に豪華な石造りの標柱を立てたものだから、その隣の木製の標柱と同じように山梨の影が薄く、「三頭山が山梨百名山か」と意外に受け止められてしまう。三頭山にはその名の通り、東峰、中央峰、西峰と三つの山頂があり、最高峰は都の領域にある中央峰。そこに都の標柱を立て、少し低い県境の西峰には県のもの置く。このようにはできなかったものだろうか。この山の大きさを実感するには、都民の森からのお手軽登山では無理で、北側の奥多摩湖畔や南面の西原集落から、標高差千メートル、3時間を超える急登を頑張る必要がある。▲私がこの山に初めて登ったのは高一の時に、奥多摩湖畔の岫沢にキャンプした中日に、皆でわいわい言いながら登った。かなりばてたメンバーも出た記憶がある。大学生となり、西原の飯尾集落から大茅尾根を登り大沢山経由での単独を計画したが、道に迷い、敗退となった。二度目に山頂を踏んだのは、それからずいぶん後のことで、西の鶴峠からの長丁場の尾根をピストンして登った。▲六年前、山仲間の会で小菅村の長作から一般ルートでない尾根を技量向上の目的で地図読み山行として登った。出だしの集落入り口でウロウロ、小沢から尾根に取り付くところで迷った。（\*コース選定者は見守るだけで、めったなことではアドバイスはしない。）やっとならば一般ルートとの合流部は西峰のすぐ隣のピークだった。下山は大沢山から大茅尾根を下った。この尾根もバリエーション・ルートであり、コンパスを使って方角を確かめながら歩いた。かつての道迷いは当然で



松姫峠付近から遠望

あったなと思った。▲長作のゲートボール場先の小橋のところから入り、取り付くのは牛飼尾根の



ルート。地図に載っていないルートだが、教えてもらった新しい三頭山の楽しみ方の実践として、数年後、単独で登った。取り付きに何の目印もなく、適当に選んだ箇所から入る。地図によれば出だしのコースは変化球。注意して行くと、納得の地形。登山では現在地の確認が大事で、地図、コンパス、高度計、スマホのGPS機能を併用する。1084m峰の手前で一つピークを右へ巻き、いくつかの小さなアップダウンを越えて明瞭な鞍部に至る。休憩を入れ、残りの登り一辺倒の急坂に行く。石柱が2つ出てくると主尾根は近く、藪もなく明るい林をつめ上げて一般ルートと合流。飛び出したところから、西峰まで案外の起伏があり、疲れた体には辛かった。▲整備されたお手軽コースがふさわしい年齢となり、体調維持の目的で、都民の森の駐車場から時計回りに石山の路、大沢山、三頭山、鞆口峠のコースを年に4、5回、季節を変えて歩いている。下山後の道筋に日帰り温泉があるのもうれしい。冬場であってもチェーン・スパイクとストックがあれば、そう危険を感じることもなく歩けるのはありがたい。展望が効く日なら、西峰からは



西峰からの富士